

# **南相馬市障害福祉サービス利用者 生活実態調査報告書**

**2017年8月**

**きょうされん南相馬支援チーム**

## はじめに

東日本大震災後、南相馬市では、原発事故により戻ることができなかった地域への帰還もはじまり、小高区に元あった事業所も、同区の新たな場所に再開所となった。また仮設から復興住宅への移動も始まった。6年経って、一見日常を取り戻しつつある利用者の生活、事業所活動ではあるが、一方で、当たり前の暮らしや労働・活動を維持、継続するためにさらに新たな課題も生じてきている。

今回のアンケートは、南相馬市の4つのNPO法人8カ所の日中事業所利用者 123 人に、一人ひとりの職員が時間をかけて個別に聞き取りで調査をした。東日本大震災5年目の昨年にもJDF被災地障がい者支援センターふくしまで同様の「南相馬市日中事業所利用者生活実態調査」を行ないまとめた。今回のアンケートは、前回の項目をより深く、細かくし、南相馬における日中活動を利用している障害のある人たちのもつ課題を明確にし、今後の南相馬市の福祉施策に、その課題を提起出来ればという思いで実施した。

**調査目的:**震災で浮き彫りになった障害のある利用者の生活のしづらさ、暮らしづらさを明らかにし、また、南相馬で暮らす障害のある方々の夢や願いをお聞きし、将来のニーズを把握する。また、その夢や願い、ニーズを今後の南相馬市の施策に反映する。

**対象事業所 :**きょうされん加盟の南相馬市の会員事業所(NPO法人ほっと悠・NPO法人あさがお・NPO法人はらまちひばり・NPO法人さぽーとセンターぴあの各事業所)

**対象者 :**NPO法人ほっと悠・NPO法人あさがお・NPO法人はらまちひばり・NPO法人さぽーとセンターぴあの利用者(回答者総計 123 人)

**調査方法:**各利用者・家族に、職員が個別聞き取りを実施

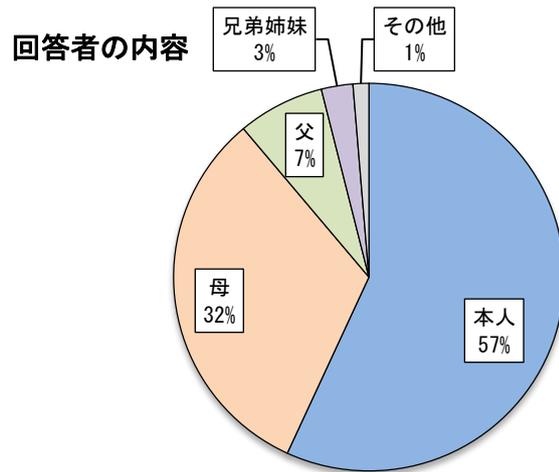
**調査時期:**2016年(平成28年)9月～11月

## 1・対象者の現状について

### 1) 回答者について

123 人の中から回答をもらった。

本人からの回答が 57%、父母姉妹その他の回答が 43%で、本人のみの聞き取りが困難で調査への回答に代弁が必要な方が半数近くいる。

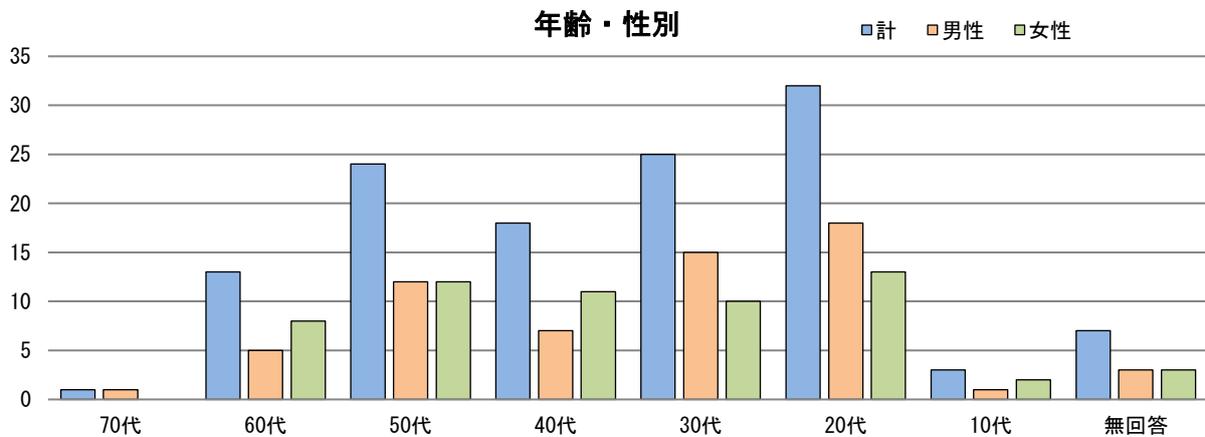


### 2) 年齢・性別・障害種別等状況

#### ア. 性別・年齢

男女比は、男性 62 人、女性 59 人とほぼ同数であった。

利用者の年齢は、20 代 (27%)、30 代 (21%) で半数近い、次が 50 代 (20%) となり、40 代 (15%)、60 代 (11%) となっており、支援学校卒業してすぐの方 10 代 (3%) が少なく、70 代 (1%) 以上も少ない。利用者は、20 代、30 代の層と 40 代、50 代に分かれているが、その事から親の世代も 60 代のシニア世代と高齢世代に 2 分化していることが想像できる。

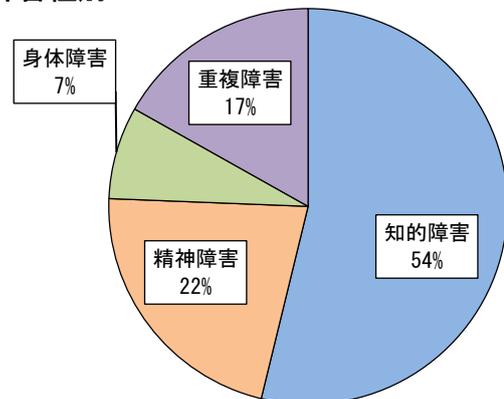


#### イ. 障害種別 (単位:人)

障害種別では、知的障害の人が 54% と半数以上を占めている。

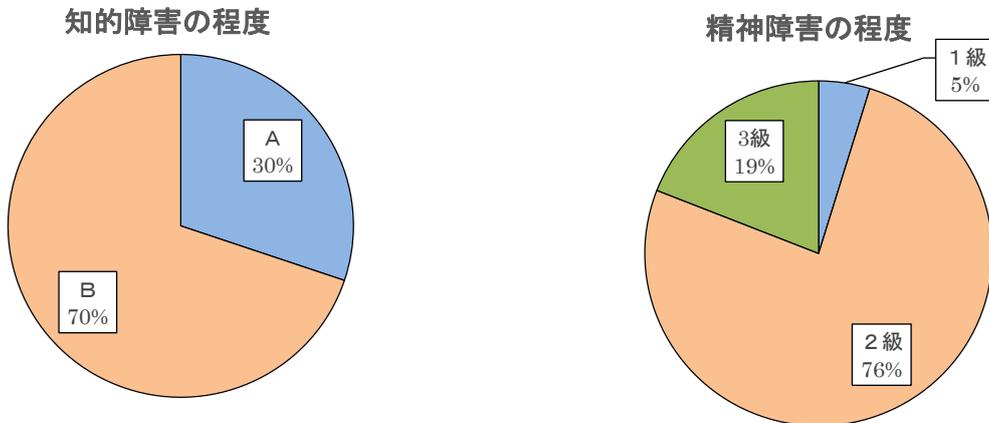
次に精神障害の方が 22% と続き、重複障害の方も 17% を占めている。重複障害の内容としては、60% が知的と身体障害の重複障害であり、30% が知的と精神障害の重複であった。

#### 障害種別



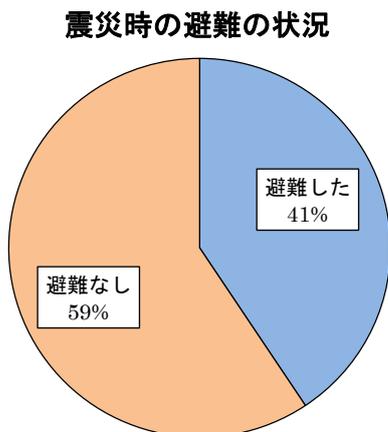
## イ. 障害の程度

障害の程度としては、知的障害では、重度判定の「A」の人は 30%、「B」は 70%であった。  
精神障害では、2級の人が一番多く、全体の 76%を占めている。3級は、19%となっています。



## 2. 暮らしについて—震災前、震災後の変化

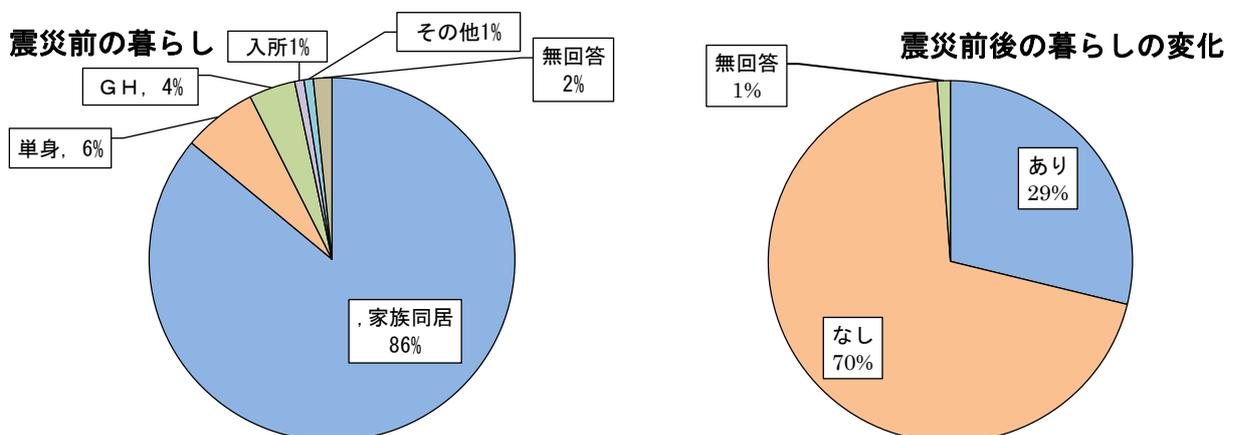
### 1) 震災時の避難の状況(避難した 50 人・しなかった 73 人)～避難できなかった人たち



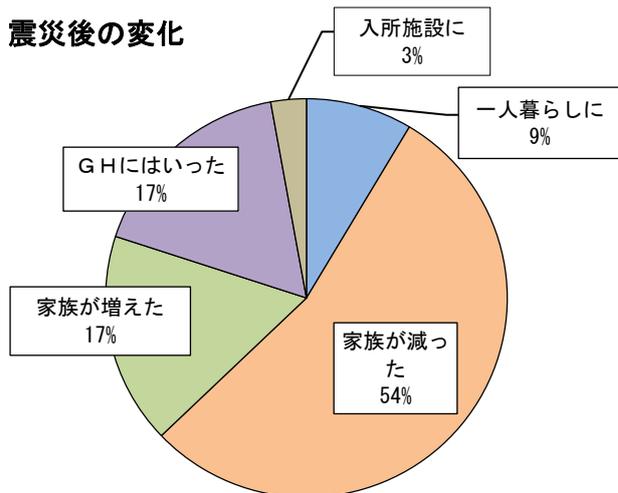
南相馬市では、原発事故後に人口の8割以上は、避難したといわれている。

しかし、利用者の中で、避難した人は 41%と低い数字となっている。全体の比の半分くらいの状況である。障害のある人の避難が、いかに難しかったかを物語っている。合わせて、障害福祉事業所が避難できなかった人の対応を早くから行なってきたことが、その人たちが生活をつづけていくことができた大きな要因となっている。

### 2) 暮らしの変化～大きく変わった住まい環境



### 震災後の変化



震災前の生活状況は、86%が家族同居となっている。ほとんどの人が家族の支援のもとでの生活となっている。グループホーム(GH)の生活は、わずか4%だった。

一方、震災前後では、29%の人が「暮らしの変化があった」と回答した。その変化の半数以上は、家族人数が減ったことにあった。祖父母、父母兄弟家族、孫など大家族から、小さい子ども抱える家族が離れ、祖父母と障害当事者を含めた家族構成になるところが多くあった。

また、1/4の人たちは、GHに入居したり、一人暮らしを始めたりと、家族から離れた暮らしの形に変わっていった。

### \* 南相馬市の現状から

年代別人口(平成 27 年国設調査より)

総人口	0～14歳	15～64歳	65歳以上
56,716人	4,885人	33,379人	18,452人
比率	8.6%	58.9%	32.5%
福島県での比率	12.1%	59.2%	28.7%

南相馬市の人口・男女・世帯数(福島県現人口調査月報より)

	人口	男性	女性	男性比	女性比	世帯数	1世帯当たり人口
H28.12.1	56,887	30,887	26,000	0.54	0.46	26,297	2.16
H23.3.1	70,752	34,393	36,359	0.49	0.51	23,650	2.99

南相馬市では、震災後から1万4千人の人口が減っている形となっている。ただし、実際はそれ以上に減っているとされている。

人口減少の内訳として、女性が男性の2倍多い。さらに福島県全体での比較でいうと若年層が県内平均より低く、高齢者層の比率が高い。

さらに人口が減っているのに、世帯数は増えている。結果、1世帯あたりの人口は、0.83人も減り、1世帯2.16人と極めて低い数字となっている。

小さい子どもを抱える家族は、高齢の親たちと同居していたが、南相馬から離れていき、高齢の親たちで住む形が増えた。大家族で支えあいながら住んでいた形が大きく崩れていったことがわかる。

### 3) 住居の状況

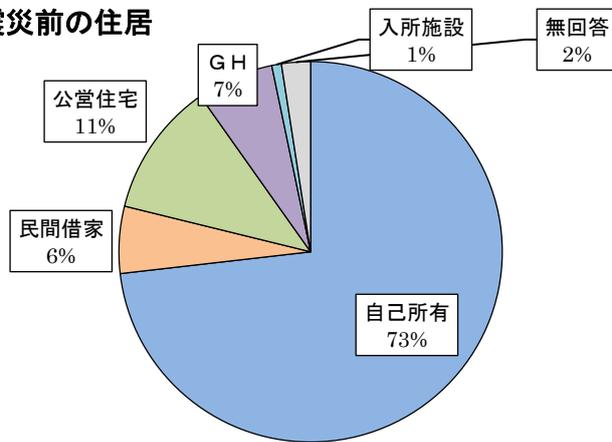
#### ・震災前と震災後の変化

震災前は、住居について自己所有と答えた方が、73%と持ち家に住んでいる方が多くあった。

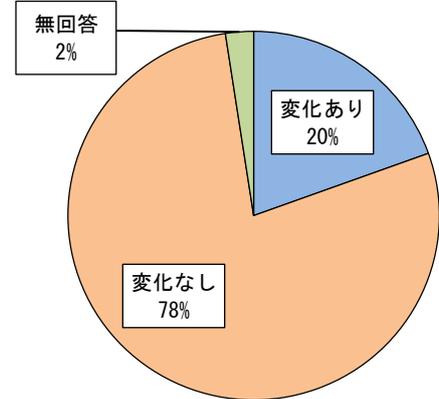
(2015 総務省資料 福島県 68.8%)

震災後において、住居の変化は、2割の人が「あり」だった。

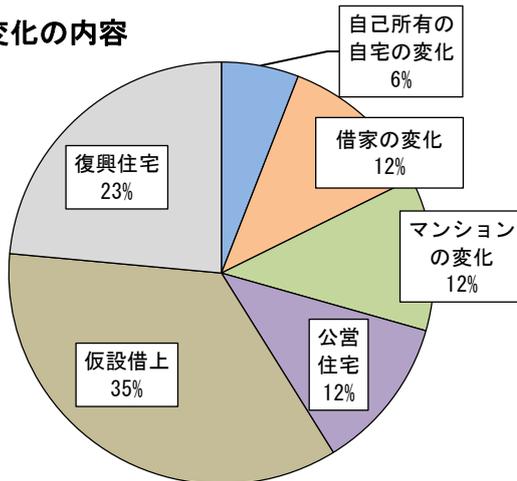
震災前の住居



震災後の住居の変化



住居の変化の内容



住居の変化の内容としては、震災後、仮設・借り上げ・復興住宅に住居をかわった人が58%と半数を超えた。仮設や復興住宅では、以前の持ち家のように大家族で生活する環境ではなく、家族の減少と言う変化に影響を及ぼしたことは、十分考えられる。

### 3. 生活について～生活に大きな変化

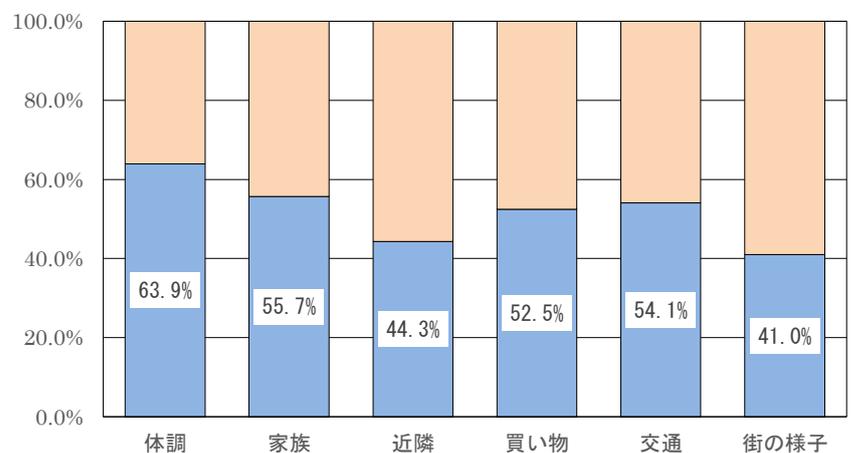
#### 1) 震災後の生活の変化について

震災後の生活の変化の内容

□なし ■あり

震災後の生活の変化

変化あり	50%
変化なし	24%
無回答	26%



震災後に生活が変わった人は、全体の 50%を占め、「変化なし」の人の2倍となった。

生活の変化の内容としては、一番多かったのは、「体調」に関わることで 63.9%を占めた。やはり精神的な部分での不調が多く、依然、その不調が続いている状況である。

「家族」のことでの変化も 55.7%を占め、大きな影響を及ぼしている。災害で、家族が命を落したり、原発事故で子ども抱える家族が家を出て行ったりと、家族がバラバラになった。さらに家族の体調が不良となったり、特に年老いた祖父母が体調を崩す中で、要介護状態が悪くなる例もあった。

生活の周囲環境面をめぐっての変化も大きいものがあった。

「交通」では、51.4%が「変化」ありと回答された。バスが通らなくなったり、逆にタクシー利用が増え、お金がかかってしまうこともあった。明らかに交通手段に制約がでたことにより、遠出ができなくなったりと生活に大きな影響を及ぼしている。一方で、街の中にトラックが増え、渋滞が増えたりもしている。

「買い物」では、52.5%の人に影響があった。店が減ったり、開店時間に制約があったりと不便さを感じている。また、売っているものの「安全」についての不安や、料理することも減り、惣菜で済ませることが増えたことや買い物の仕方でもネットショッピングが多くなったなど生活様式に変化もでてきている。

より身近なところで「近隣」のところでは、44.3%に影響があった。子どもや若者の多くが引っ越し、お年寄りばかりになった所や近隣の人も減ったり、知らない人が増えたりと近所づきあいが難しくなり、あいさつや会話が減ったりしている。また、仮設や復興住宅に居を構えると近所づきあいが難しかった例もあった。

「街の様子」としては、41%の人が変わった印象を持っている。原発事故により人が減り、お店も減り、逆に住めなくなった住まいの代わりとして仮設や復興住宅という新しい建物が増え、復興工事などによる土木・建築業者の車の増大は、人が減った街だが交通量は増えたり、外からの工事現場の人が増えるという今迄の生活から遠く離れた街の風景となっている。

## 2) 「震災後の生活の変化」についての自由記載から

### ①体調

- ・運動時間(歩く)が少なくなった。
- ・頭痛や体調不良が増えた。
- ・保護者の体力低下
- ・5年がたったが精神的なケアは進んでいないと思う。
- ・ストレスが以前よりたまと感じている。
- ・以前より元気がない。
- ・震災直後は事業所が開所しておらず、情緒不安定になることが多かった。

### ②家族

- ・父、母、両親が亡くなった
- ・震災で父が出て行った
- ・家族の人数が増え、子どもたちがいるため生活のリズムが崩れている。
- ・家族の体調がすぐれない。悪くなった。
- ・兄弟姉妹が家を出た為、寂しくなった。
- ・家族がバラバラになった。
- ・姪っ子たちが避難して寂しい。

- ・みんな仮設に入っていた時は調子が悪かった。
- ・祖父母が共に介護が必要な状態になった。

### ③近隣

- ・隣組が少なくなった。
- ・近所づきあいが難しくなった。
- ・仮設に住んでいたり、復興住宅に住んだりして、付き合いはあまりない。
- ・みんな優しく、時々声をかけてくれる。
- ・周りに新築の家が増え、新しい人達が増えた。
- ・前は近所の人とあいさつや会話があったが、今は知らない人も多く、話す機会がない。
- ・体調不良で遠くの病院に行ってしまう、遊んでくれていた人がいなくなった。
- ・除染の宿舎が近くにあるので、心配している。
- ・地域の若い人たちは避難したまま戻ってこない。お年寄りばかりになってしまった。
- ・子どもがいる家庭、周囲が半分以上引っ越していった。

### ④買い物

- ・不便になった。開いているスーパーが少なくなった。
- ・地元のスーパーで売っている物について、放射能が検査済みとあるがちゃんと測っているかわからない。
- ・震災前は食料を買って料理していたが、今はお惣菜を買って食べている。
- ・ネットショッピングが多くなった。
- ・店が早く閉まってしまう。

### ⑤交通

- ・JRなくて不便だ
- ・バスが通らなくなった。
- ・タクシーを利用している。タクシーを利用するとお金がかかる。
- ・移動手段がなく遠出ができなくなった。
- ・特に街の中はトラックが多く、渋滞が多い。

### ⑥町の様子

- ・震災当時に戻ってきていると思う。
- ・人がいない・店舗が減った
- ・仮設が増えた。復興住宅が増えた
- ・交通量が増えた。
- ・震災前は公園などによく行っていたが、今は工事があり、行けない。
- ・震災後はゴーストタウンのようで寂しかった。
- ・コンビニが増えた。除染作業員が増えた。

## 3) 経済生活の変化は～厳しくなった経済状況

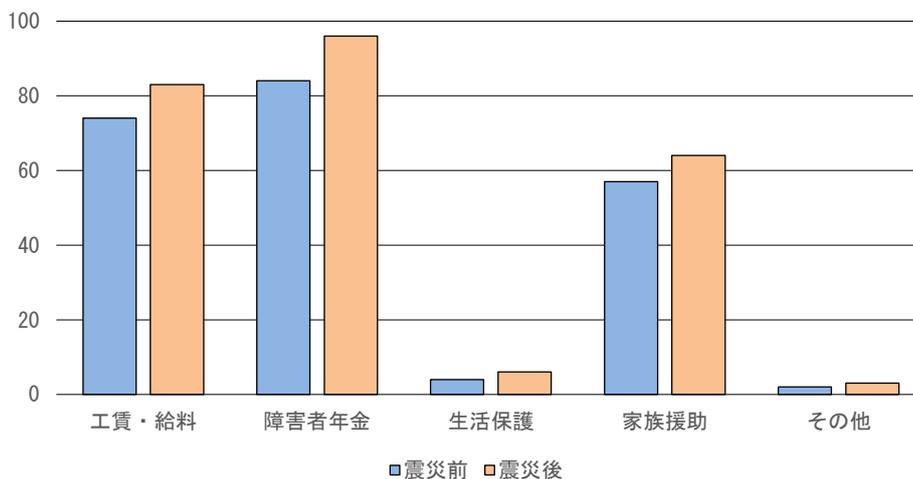
収入内容については、震災前後で、「工賃、給料」では、9人の12%増であった。「障害者年金」では、12人の14%増で、「家族援助」も7人の12%増でした。

こうした背景には、一般就労していたが就労先がなくなったとか家業の手伝い(漁業・農業など第1産業など)

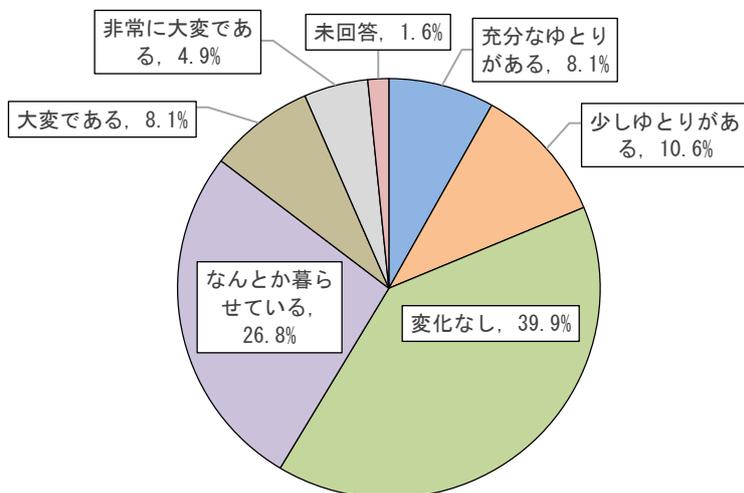
ができなくなったなどで収入が少なくなったのであることが考えられる。

特に「家族援助」が増えたことは、厳しい実態です。経済援助を受けている人は、震災前は 46%、震災後は 52%と増えている。なお無回答が 30%あるので、実際に家族からの経済支援を受けているパーセンテージはもっと高いと予想される。

震災前後の収入内容



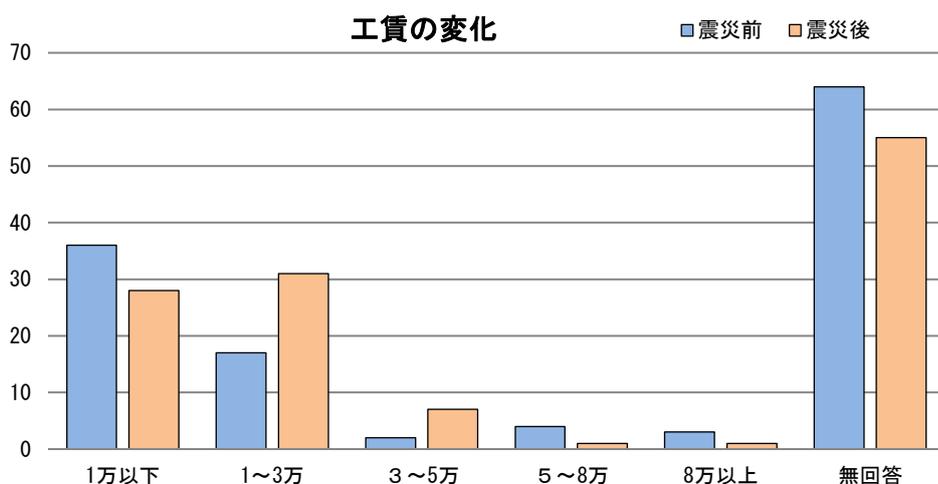
現在の経済的生活について



「十分なゆとりがある」「少しゆとりがある」を合わせると全体の 18.7%であった。

一方、「非常に大変」「大変」を合わせると 13.0%となり、ギリギリの生活をしている「なんとか暮らせている」を合わせると 39.8%となった。4割弱の家族が震災前に比べると生活が厳しなっている。

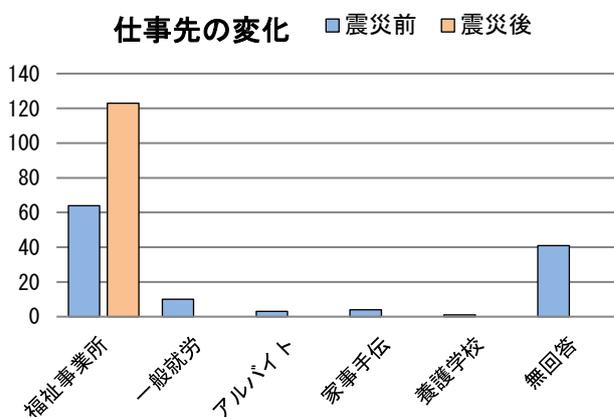
・ 月の工賃・給料について



工賃の変化としては、1万円以下では、震災後に人数は減り、逆に1~5万円のところは、増加した。工賃としては、震災前に比べて増加した。震災直後は、仕事もなく、工賃支払いに苦労していた時期も続いたが、震災後に南相馬の日中事業所が手をつなぎ、県内関係者の支援や補助団体からの支援もあり、南相馬ファクトリーとして、仕事起こしや販売のネットワークづくりを本格的に進めたり、全国からのさまざまな仕事支援などを通じて、現場職員の献身的な取組もあり、工賃増額につなげていった。

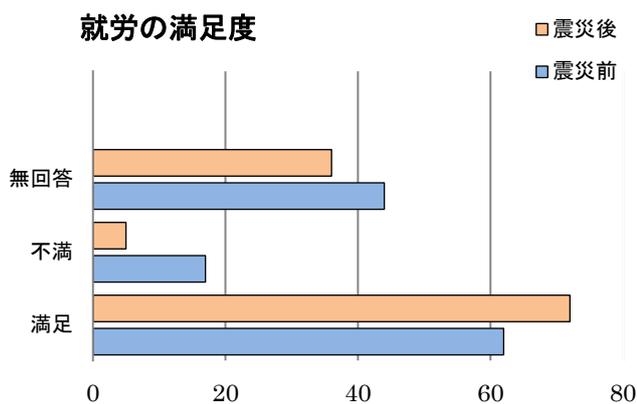
4) 仕事についての変化～一般就労から日中事業所へ

一般就労をしていたが、それが出来なくなった人が8%おり、その人たちの所得は減っている。



日中事業所を利用している人も震災前には、一般就労・アルバイトなどの何らかの就労をしていた人は13名いた。震災・原発事故で働いていた事業所が閉鎖されたり、避難したことによって働くことが難しくなり、その人たちを日中事業所がフォローをしたこととなる。

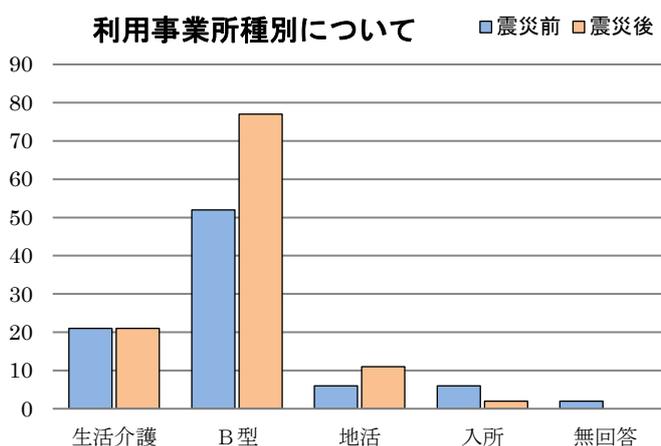
## 5) 就労の満足度について



就労への満足度は、「不満」が震災前の17人が5人と減り、逆に「満足」が62人から72人と10人増えた。

震災・原発事故で大きく崩れた生活の中で、「就労」が大きな生活の支えとなり、「満足」する人達が増えたと思われる。

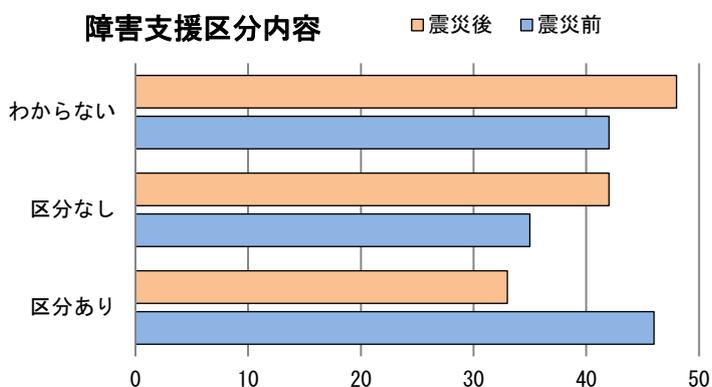
## 6) 福祉サービスの利用について～日中事業所への利用急増～ ・福祉事業所利用について



震災後、就労継続支援B型では25名、地域活動支援センターでは5名増加した。

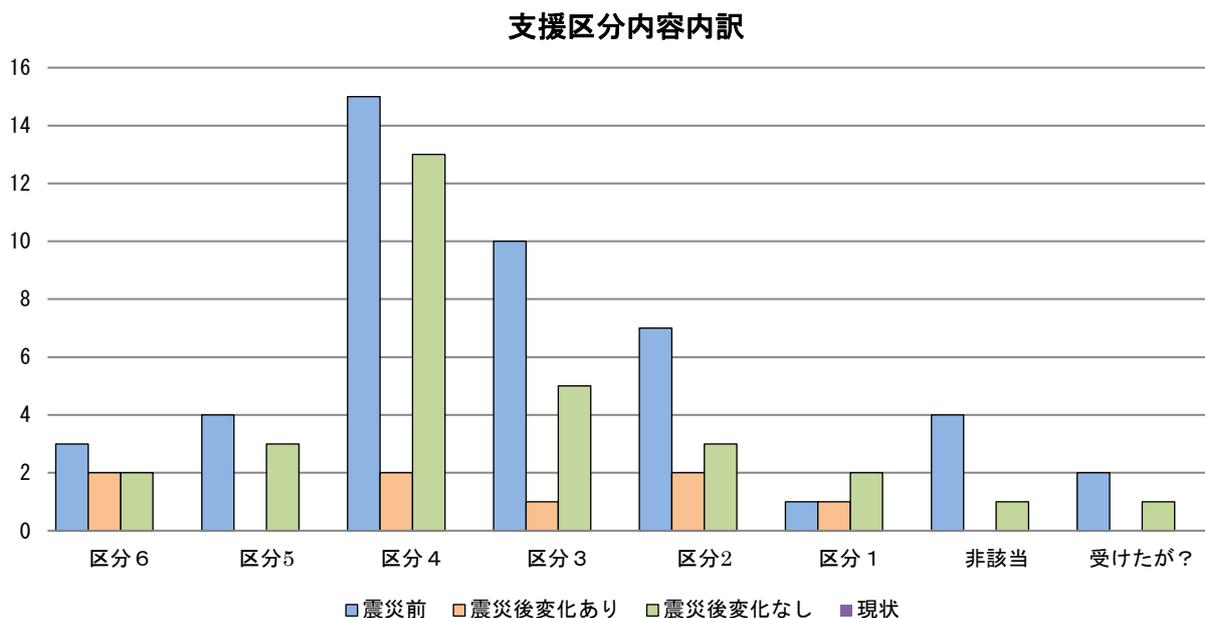
一般就労から福祉就労へ、また在宅から福祉的就労へ、入所から福祉的就労へと変わった方が30名を数えた。うち、入所からは4名の方が福祉就労に移った。

## 4. 障害支援区分について～なぜか少なくなる重度者判定～



障害支援区分については、区分がわからないまたは無回答(77人)を除き、区分認定を受けた人46人のうち、非該当が9%、区分1が4%、区分2が16%、区分3が22%、区分4が33%、区分5が9%、区分6が7%であった。

・ 障害支援区分内訳について



**全国平均との比較**

	区分6	区分5	区分4	区分3	区分2	区分1
震災前	7.5%	10.0%	37.5%	25.0%	17.5%	2.5%
全国平均	23.6%	15.0%	18.6%	21.3%	18.8%	2.5%

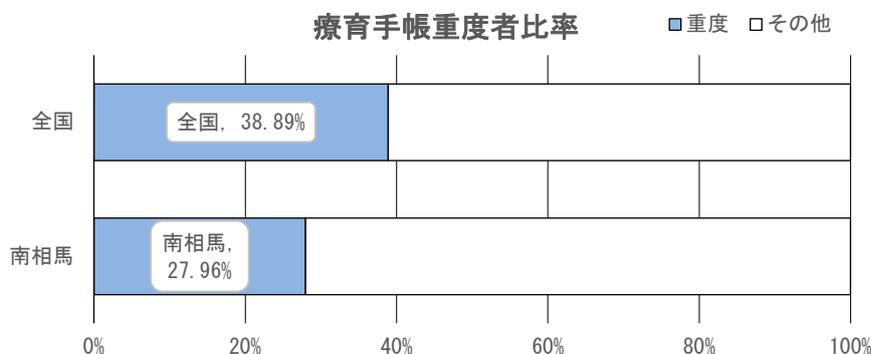
\* 全国平均は、厚労省「障害支援区分の審査判定実績(平成 27 年 10 月～平成 28 年 10 月)」より

障害支援区分の程度内訳を全国平均と比較すると区分6で-16.1%、区分5で-5%と区分6と区分5の重度で合計 21.1%も少ない。これは、特筆すべきことである。区分4では、逆に 18.9%多い。

全国統一の障害支援区分判定において、区分6や区分4の重度判定にこれほど差が生じることは、区分調査の在り方に大きな課題を残している。

また、療育手帳取得者の重度比率においても全国平均とは、差が出ている。

全国では、38.89%だが、南相馬では 27.96%と 10.93%も比率が低いことも特徴的である。



・ 全国は、平成 23 年生活のしづらさなどに関する調査より

・ 南相馬は、第 4 次障がい者計画資料より

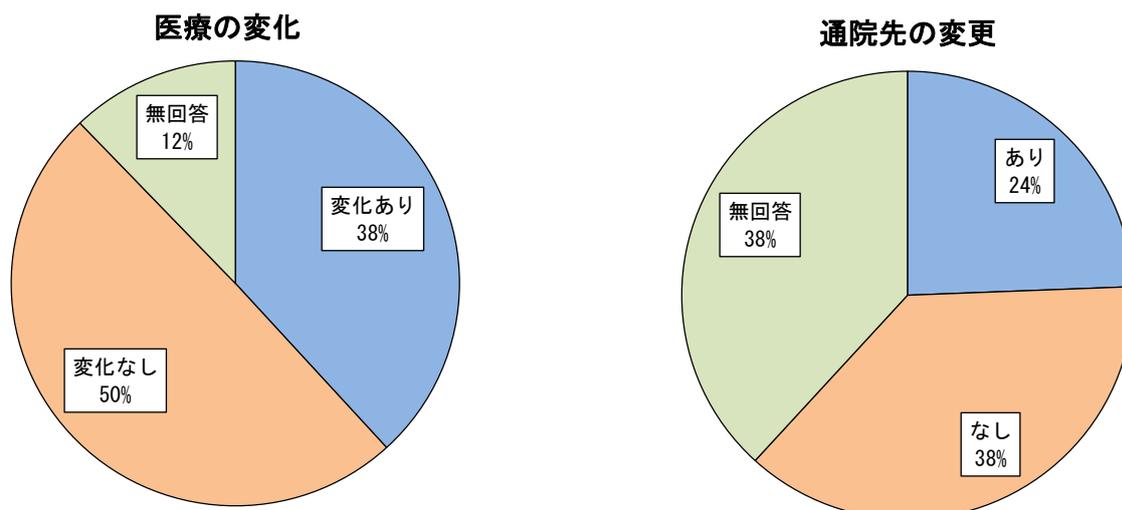
## 5. 医療について

### 1) 震災前との変化について～4割近い人たちに変化が

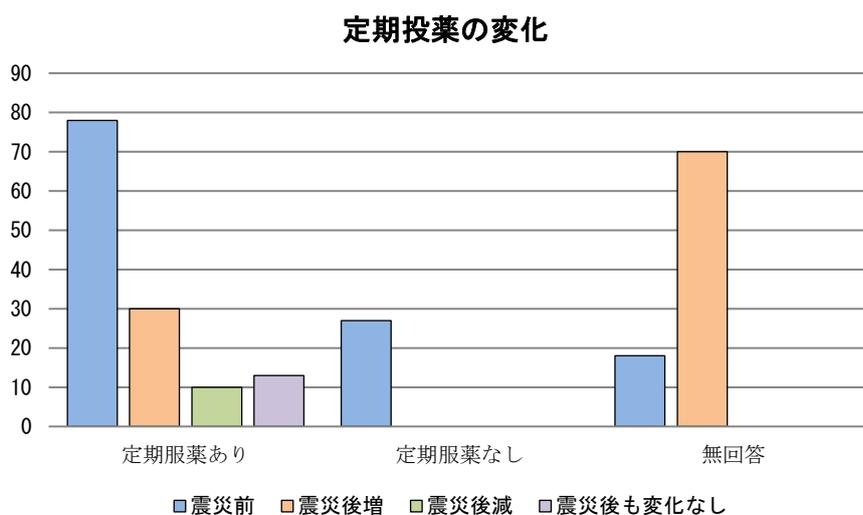
震災前後では、医療面においては、38%の人に変化があった。

また、通院先の変更は、24%の人にあった。これは、医療機関が閉鎖されたり、縮小されたり、また、新たな科における診察が増えたことなどによる。

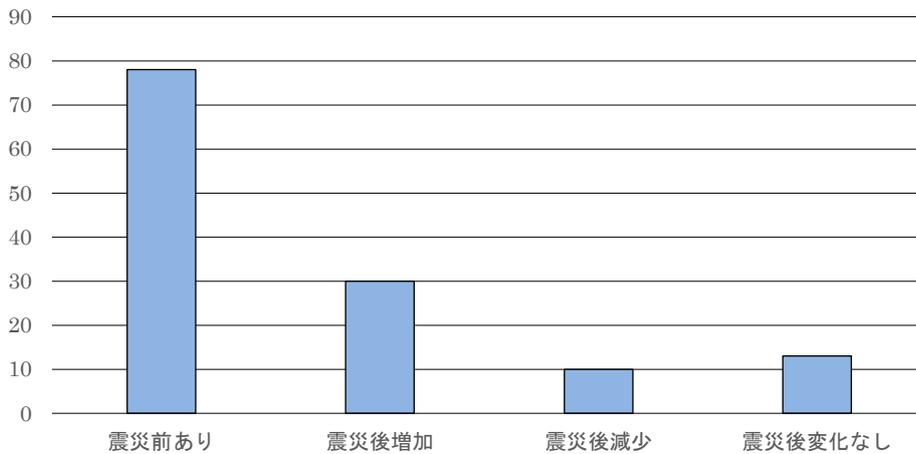
定期服薬においては、24%の人が増えている。精神的なストレスによって、さまざまな病気も発生しての服薬増加が目立った。



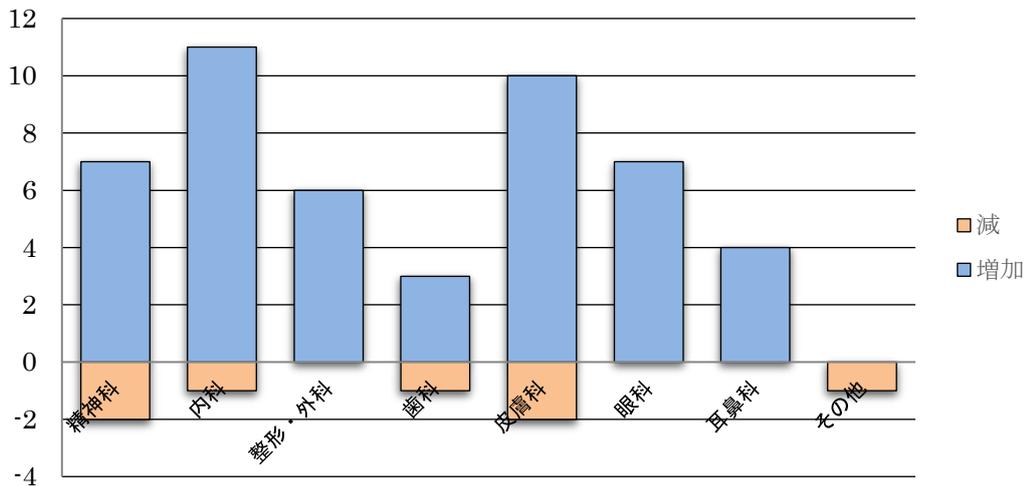
### 2) 定期投薬の変化～増えた通院と投薬



### 定期投薬の変化



### 震災前後での診療科目の通院増減（単位：人）

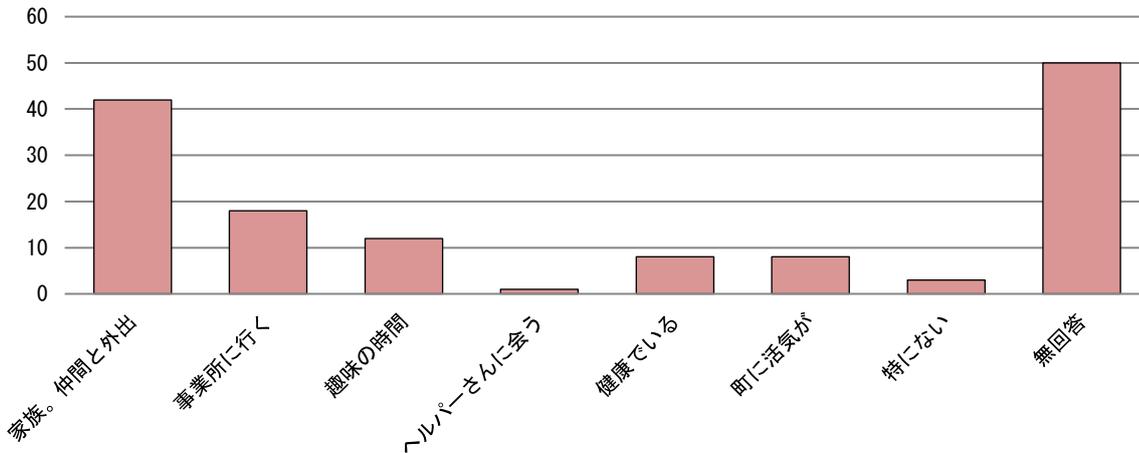


### 3) 自由記載より

- ・循環器科。地元の循環器科に紹介状をもらってきたが震災で行けなくなった。
- ・てんかん、肝臓の不良など精神的ストレスが増えた。
- ・ストレスにより帯状疱疹、ヘルペス。
- ・甲状腺機能亢進症(バセドー病) 甲状腺科が増えた
- ・主治医がなくなり、あっちこっち探して増えた
- ・病院が閉鎖した為。別の心療内科へ。くすりが増えた。
- ・痛風になった。
- ・混雑して行かなくなり減った

## 6. 楽しい事、嬉しい事 (回答 73・無回答50)

### 楽しい事、うれしい事

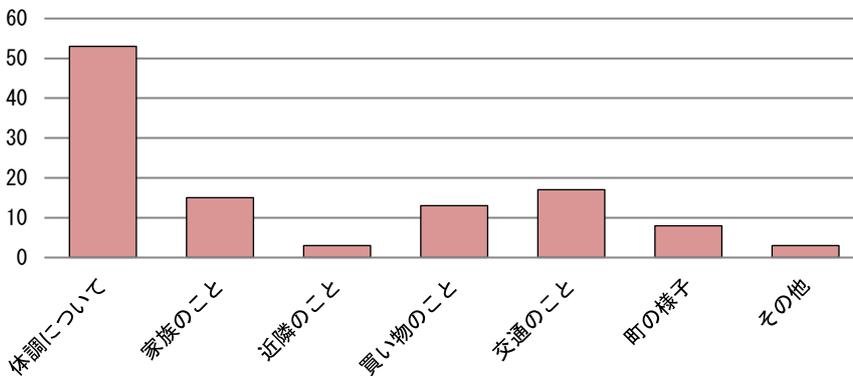


今、「楽しい事やうれしいこと」としては、「家族や仲間と外出する」ことが回答者の 57.5%の人が挙げ、一番多かった。次には、「事業所に行く」が 24.6%、「趣味の時間」が 16.4%となっている。

一方で、震災や原発事故をへて、「健康でいる」や「町に活気がある」ことを挙げている人が 9.5%続いたのは特徴的であった。

## 7. 今困っていること～特筆すべき「体調」不調

### 今、困っていること

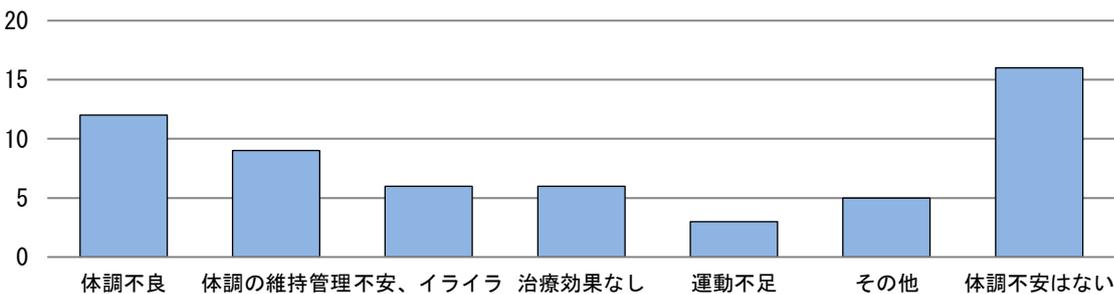


「今困っている」こととして、「体調」を挙げた人が 53 名と最も多かった。やはり、原発事故によって長引く不安定な生活環境からの不安感からくる精神面や他の分野における不調などによるものと思われる。

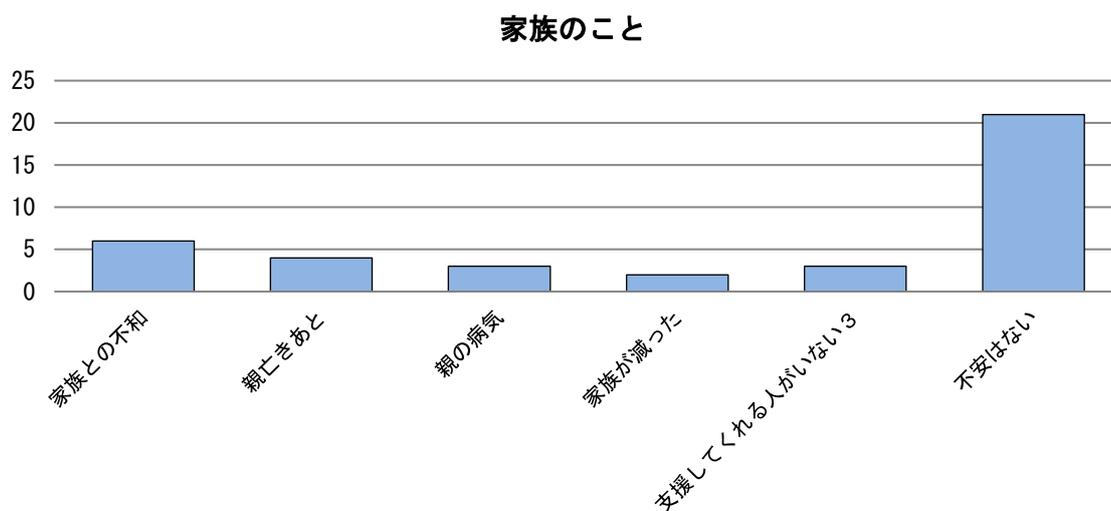
次には、「交通のこと」や「買い物のこと」などが多い。

(体調のこと内訳)

### 体調のこの内容



(家族のこと内訳)



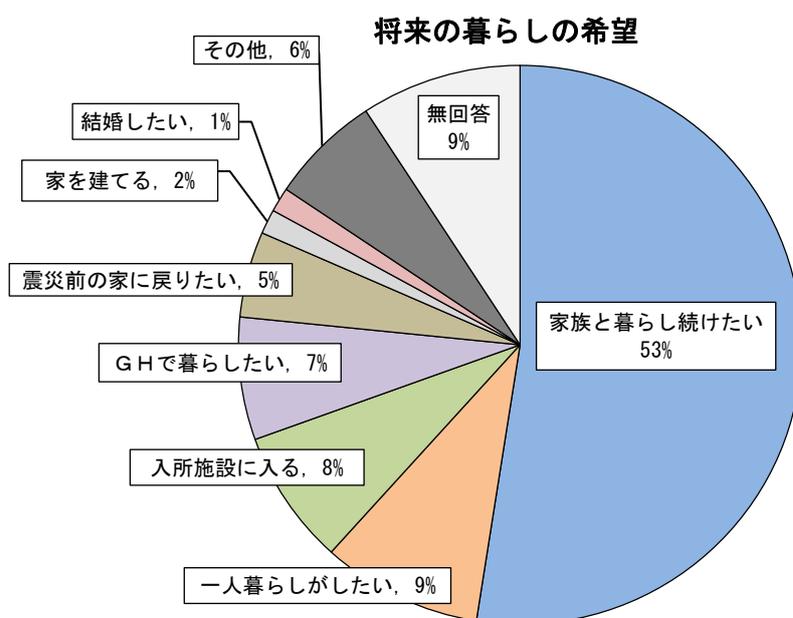
**8. これからのこと～9割もの人が希望や夢を訴える**

1) これからの希望

ア. 将来の暮らし(回答 110 人・無回答 13 人)

将来の暮らしの希望では、家族と暮らし続けたいが 53%も占めていた。次いで一人暮らしが9%、施設に入りたいが8%(家族からの希望と思われる)。グループホームが7%であった。また、震災前の家に戻りたいが5%あった。

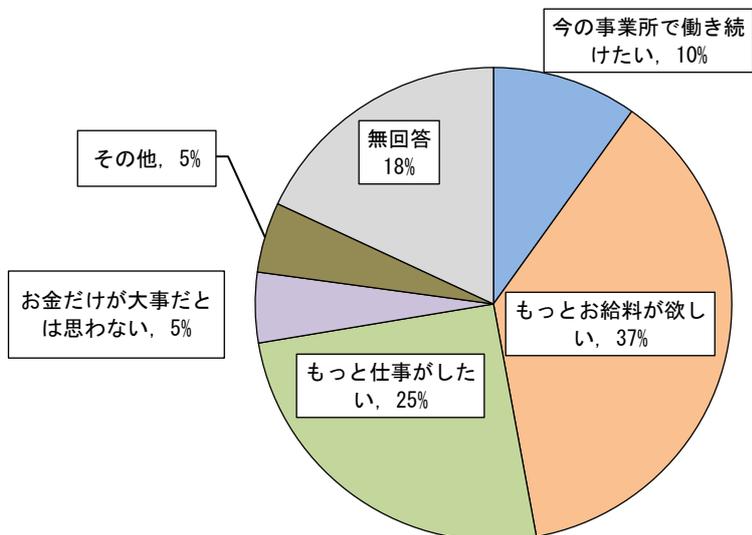
震災後、生活が変わった人の半数以上が「家族が減った」という回答があった。単に家族介護があたりまえと言う思いだけではなく、震災時の家族との分離不安や災害時の孤立の恐怖体験が、それぞれの中で、大きく、家族とのつながりをこれからも大切にしていきたい思いの反映であると考えられる。



イ. 将来の仕事(回答 108 人・無回答 15 人)

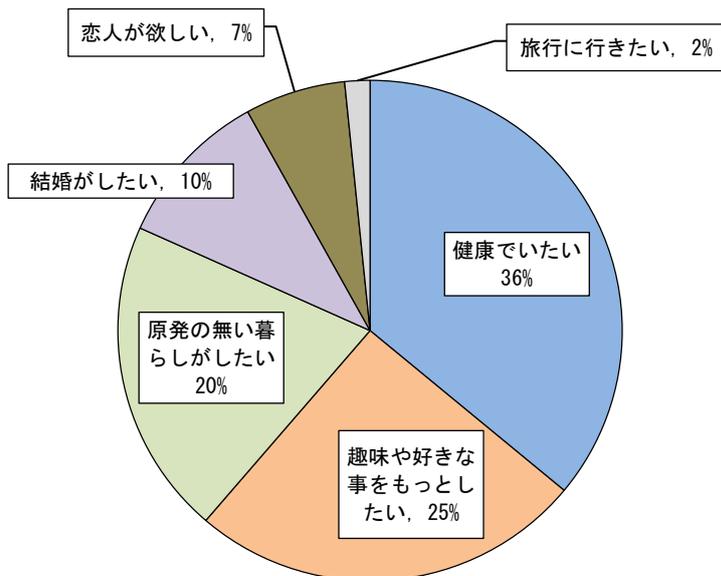
仕事については、もっとお給料が欲しいと希望されているのが 37%、もっと仕事がしたい 25%、今の仕事を続けたい 10%、お金だけが大事ではない 5%となっている。

将来の仕事に対して



2) これからの夢は(回答 106人・無回答 17 人)

これからの夢



これからの夢の質問に対する回答率は、他の質問に比べて最も高く、86%の人が回答した。大変な状況の

中でも前を向いて、希望を、夢を見出したいという思いがあふれていることに未来を感じる。

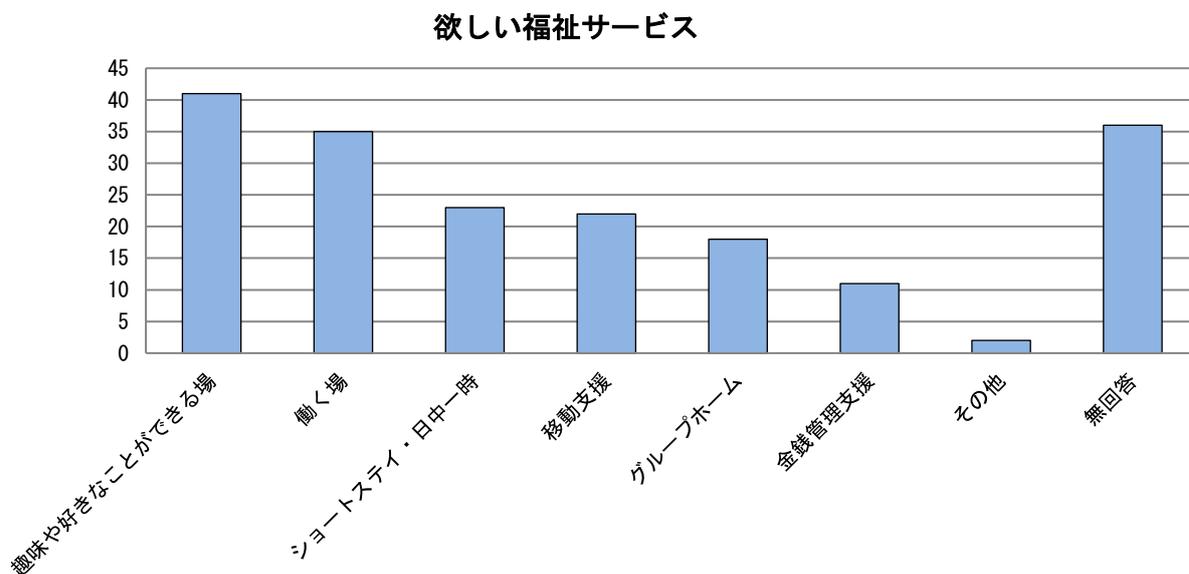
これからの夢では、「健康でいたい」が 36%、そして「原発の無い暮らしをしたい」が 20%であった。南相馬では、何より原発事故に関連してくる思い、そして原発事故が解決されていくことへの強い思いが背景にあることは間違いない。「健康でいたい」という夢を最も大きかったことも原発事故による健康不安の解消ということが背景にあると思われる。

この夢は、「なによりも安心して、家族みんなで暮らしたい」という思いであり、障害の重い人たちにとっては、家族との暮らし、健康な暮らし、原発の無い暮らしの上には、次の暮らしはないのだろうと考えられる。

南相馬市の障害のある利用者の希望は、震災がなければどうだったのだろうかと考える必要もある。回答の結果は、震災後の影響がまだまだ尾を引いている中で、現在が「当たり前の生活」ではないこと、常に不安な思いがあることを表しており、それらの不安を改善しないと、次の暮らしへの夢が語れないのではと思う。

一方で、「趣味や好きなことをもっとしたい」が 25%あった。これは、「安心・安全の暮らし」から、さらに一歩進んだ「安心・安全で豊かな暮らし」を求めていることにある。つまりQOL(生活の質)の向上をもとめていることもアンケートから読みとることができる。趣味や好きなことが出来ていない要因は何か、どうすればQOLが充実するのかなどを考えていく必要がある。

### 3) 南相馬市に欲しい福祉サービス～もっと生き生きした暮らしと安心できる暮らしを

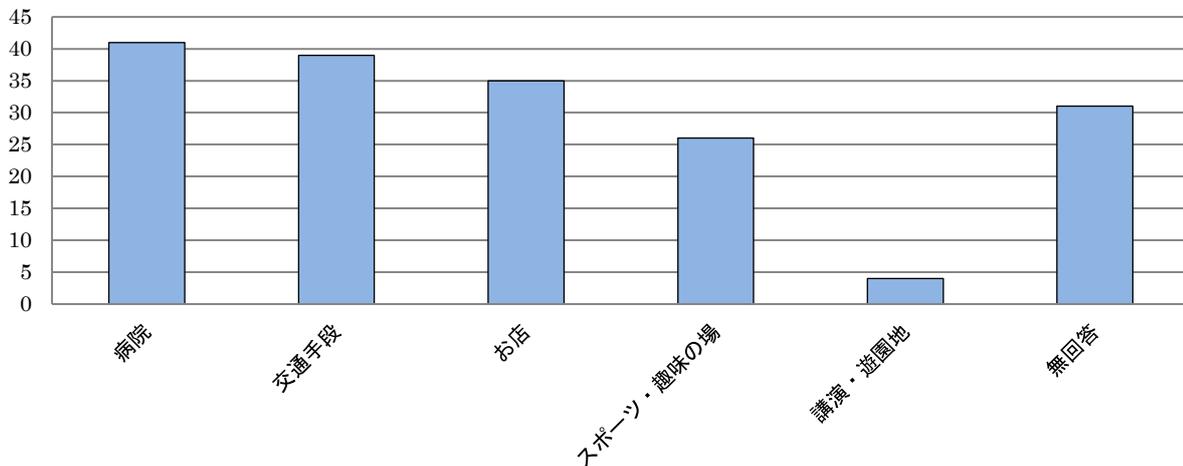


「欲しい福祉サービス」では「趣味や好きなことが出来る場」が一番多く 34%もあった。次に「はたらく場」が 29%、「ショートステイ・日中一時」が 19%、「移動支援」が 18%、「グループホーム」が 15%、「金銭管理支援」(成年後見等)9%だった。

#### 4) 南相馬市にあればいいもの（回答 92 人・無回答 31 人）～切望される医療と交通手段

暮らしの中では、大きく上がっていたのは病院がほしいが 34%、次に交通手段 32%、お店 29%、趣味や好きなことができる場 22%であった。

南相馬市にあればいいもの

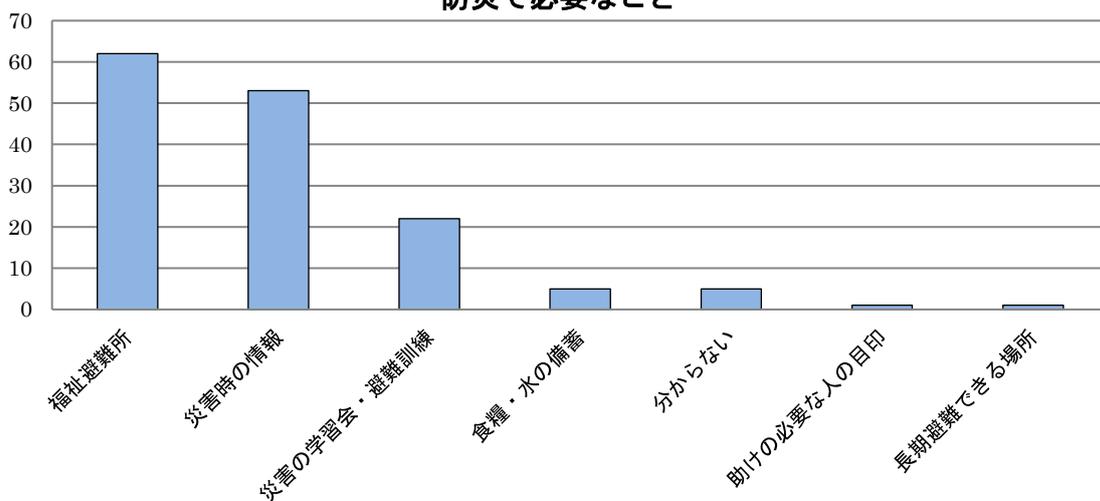


### 9. これからの防災について

#### 1) 南相馬市に必要なと思うこと(回答 103 人無回答 20 人)

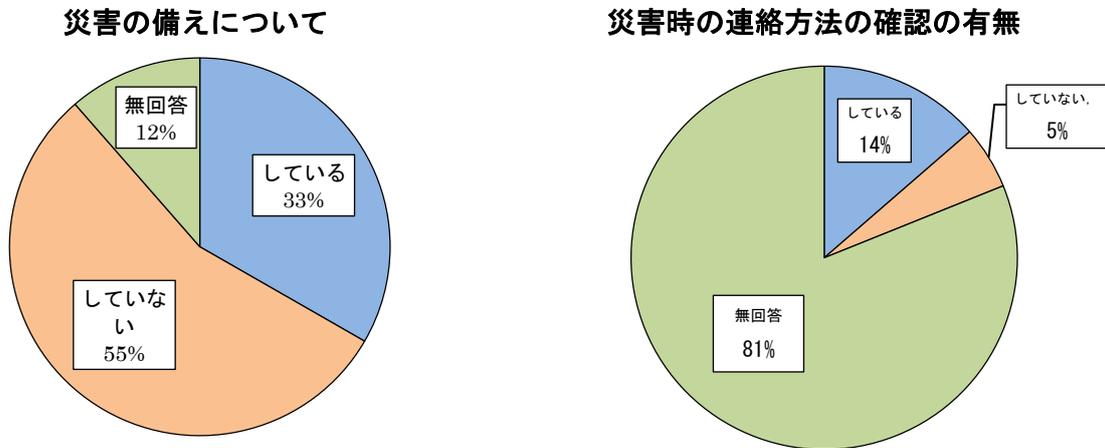
これからの防災対策で、最も必要なこととして福祉避難所が上がり、6割以上の人からの要望であった。次は、災害時の情報提供となっている。これは、大震災や原発事故後の情報が混乱し、適切な情報がきちんと来なかったという経験が背景にある。次に学習会や避難訓練が上がっている。さらに備蓄関係や助けの必要な人の目印、長期避難出来る場所となっている。

防災に必要なこと



## 2) 災害の備え、災害時家族等と連絡方法の確認の有無

災害の備えはしていない方が 55%と多く、理由としては、備蓄する場所がないという答えが多かった。また、災害時の連絡方法の確認については、「している」が 14%であった。



## 3) 自由記載(今後の災害が起こったら・・・)

- ・どこに避難したらよいかわからない。
- ・親類は市内にいるが付き合いは無い
- ・食糧・ガソリン・ライフラインが足りるか心配
- ・災害発生時に福祉事業所から避難した場合、家族と会う手段がない(家族が車の運転ができないため)。福祉事業所と自宅の間の距離がある。
- ・病院(かかりつけがなくなるか)
- ・倒壊が不安、とにかく怖い。食料が不安。
- ・事業所と自宅の連携を大事にしたい。
- ・食べていけるだけの支えが必要です。
- ・北朝鮮のミサイルや、地震、台風による洪水などが心配です。
- ・精神的に参ってしまうので、他の病気になる事が心配です。
- ・夜に急に避難することが難しい。(高齢の母、障がいを持つ本人)バスが出るといっても、そこまでの交通手段がない。
- ・家族がバラバラになること。
- ・海が近いので津波がこないか。
- ・福祉避難所に入れると良いが、なかったら車の中になってしまう。
- ・相馬市の福祉避難所がわからない。
- ・車イスなので、地震の時にテーブルの下にもぐれない。
- ・避難している時に車イスで入れるトイレが心配。
- ・車イス用のトイレがないところには行けない。
- ・避難所(体育館)などでパニックにならないか心配。避難所先の作業所へ行く。そこでパニックになる。
- ・車の移動(利用)が不可欠なのでガソリンが不足すること。

- ・家がくずれないか心配。
- ・食糧不足になること。
- ・どこに避難して良いかわからない。
- ・同じ場所にいない時の心配。
- ・道路を多くしてほしい(逃げる為の道)・震災専門道路を作ってほしい。
- ・飛行機の離着できる場所。
- ・緊急の時に連絡ができるかどうか心配だった。現在家庭でスマホを準備していただいているので、メールができるようになった。
- ・避難所がみんなと一緒にだと不安。ストレスがたまってしまう。
- ・福祉避難所開設しても情報がなければ行くことができない。
- ・原発が爆発して原町から出なければなくなった時、避難所には絶対に行きたくないのどうしたらいいかわからない。
- ・事業所が利用できなくなることが心配。
- ・一人なので電柱が倒れないかが心配。
- ・病院や治療中のお薬。
- ・娘や息子達と遠い生活しているので、不安で心配。

## まとめ

東日本大震災・原発事故が起きて、7年目を迎えている。

今回、実施した南相馬市での日中障害福祉サービスを利用している通所者の生活実態調査は、障害のある人やその家族の生活実態やさまざまなニーズを明らかにした。

この調査への回答者は、日中事業所利用者の123名の人たちから回答をもらった。南相馬市が障害者計画の中で、生活実態を表記する場合に参考とした「相双地域における精神障害者保健福祉手帳所持者に対する調査(平成26年2月調査)」の回答数は最大116名となっている。その調査と比較しても、一定条件をつけた福祉サービス利用者の123名という今回の調査は、南相馬市の計画で参考にした調査以上に生活実態を明らかにしたものであり、障害者計画づくりに大変参考になるものです。

震災前は、86%が家族同居で、グループホームで生活している人は、わずか4%だった。きょうされんの調査(2016年)では、障害福祉の施設・事業所を利用している障害のある人で、親と同居が54.5%、きょうだいが22.7%と合わせて、家族同居は77.2%ということで、家族依存の生活実態が大きな問題となった。それよりも、南相馬では、家族同居が多かった。一方で、きょうされん調査で、グループホーム入居者は18.1%だったが、南相馬は、その1/4以下と極めて低い水準だった。圧倒的に家族同居の形で生活を支えている状況であった。

しかし、原発事故は、その生活の様相を大きく変える。南相馬市全体でも、子どもを抱える若者家族は離れていき、大家族から小家族の方向に生活の形が変わっていった。障害のある人を抱える家族も同じ傾向となる。結果、2割弱の家族は人数が減った。

また、居住環境も2割の人が変わった。

生活の内容が変わった人は、全体の半数を占めた。その中で一番多かったのは、64%を占めた「体調」面だった。次に55%の「家族」。「交通」や「買い物」も50%強を占めた。さらに環境面として「近隣」が44%、「街の様子」が41%を占めた。

医療においては、4割弱の人に影響があった。1/4の人が通院先が変わり、通院が増えたところは、内科・皮膚科・精神科・眼科の順で増えています。また、1/4の人が定期投薬が増えた。こうした変化の背景には、病院・診療所の縮小された反面、長期にわたる災害時の状況が続く中で、さまざまな病気の発症や悪化があったことによると思われる。

「就労」していた人も勤めていた職場の変化により、1割の人が「就労」から「就労B」の福祉的就労の場に移った。日中の場における福祉的支援によって支えられる人が増えた。

一方で、日常生活において、経済面も含めて、12%の人が家族からの支援が増えた。

こうした生活の中身の変化は、ギリギリの生活をしている「なんとか暮らせている」と答えた人も含めると4割弱の人たちがゆとりのない厳しい生活をしていると実感している。

こうした生活の中で、今、困っていることとしては「体調」の問題が最も多い。やはり健康にかかわる問題は、深刻であり、根が深い問題でもある。次に「交通」、「家族」「買い物」と続く。

この調査で、最も特徴的だったことは、「暮らしへの希望」、「これからの夢は」という問いに対して、86%以上もの人たちが答えたことである。大変な状況の中でも前を向いて、希望を、夢を見出したいという思いがあふれていることに未来を感じる。

暮らしの希望に対しては、「家族と暮らし続けたい」が53%を占めた。大災害や原発事故の影響が続き、家族

が分かれざるを得ない状況が広がる中で、家族とのつながりをむしろ大切にしたい思いが大きくなっていくことが反映されている。

「これからの希望」では、「健康でいたい」という回答が一番多くあった。これは、原発事故からくる健康不安などを反映したものであろうと思われる。また、「原発がない暮らしをしたい」が 20%を占め、原発事故に関連する内容が半数以上を占めた。

一方で、「趣味や好きなことをもっとしたい」が 25%あった。「安心・安全の暮らし」を当然求めつつ、さらに一歩すすんだ「安全・安心で豊かな暮らし」を求めていることにある。つまり生活の質を求めている。

こうした希望から、南相馬市にあればいいものという問いには、病院が 34%、交通手段が 32%、お店が 29%となっている。さらに趣味・スポーツ・遊園地などの好きなことができる場に 32%の人が回答していた。

南相馬市に欲しい福祉サービスとして、「趣味や好きなことができる場」が 34%と一番多くあった。

次に「働く場」が 29%、「ショートステイ・日中一時」が 19%、「移動支援」が 18%、「グループホーム」が 15%を占めた。地域生活を支えていくために必要な「ショートステイ・日中一時」や「グループホーム」を合わせると 34%となり、生活支援に関わる福祉サービスに大きなニーズがあることは明らかである。また、「移動支援」もこれから求められ、生活の質を少しでも高めていくためには絶対に欠かせないサービスである。

こうした福祉の充実を求める声が大いことが明らかになった。さらにそうした福祉の充実を実現させていくためには、障害の重い人への必要な人的サービスの課題がある。障害が重く、支援がたくさん必要な人への必要な支援の度合いを明らかにしたのが障害支援区分である。この結果によって、人的支援の密度につながる。しかし、今回の調査では、障害の重い人の区分結果が全国平均と差がでていたことが明らかになった。その結果、現場での支援体制の厳しさにつながっている。

今回の調査で、実にたくさんの実態と障害当事者・家族の願いが明らかになった。

原発事故の終焉がなかなか見いだせない状況にありながら、南相馬市が街の立て直しを模索されている。

その中であって、さまざまな困難を抱えた障害のある人やその家族は、なんとか自分たちの生活を地域で根付かそうと、並々ならぬ努力を続け、関係者の献身的な支えが広がってきました。障害分野でのそうしたとりくみは、これからの南相馬市において新しい道を開く大きなひかりとなると思う。

そのひかりを少しでも広げていくためにも、南相馬市のこれからの障害福祉の充実は、絶対に必要な事である。とりわけ、今検討されている障害者計画に、この調査がどう反映されていくかは、大切な事である。

合わせて、南相馬市の障害福祉の充実のためには、南相馬市だけの力では限界がある。福島県・国がしっかりとバックアップしてこそ実現できるものである。そのためには、南相馬市を含んだ双葉郡で、特別福祉支援体制を組む意味で、福祉特区のような思い切った手立ても必要である。